動労千葉

国鉄千葉動力車労働組合
〒280 千葉市要町2番8号（動力車会館）
電話｜（鉄電）千葉 2935・2936番
（公）千葉（22）7207番

90.6.29 No. 3242

JR体制（JRとJR総連結託体制）危機のはじまり

―その1―

革マルの正体暴露

JR総連の新体制と言動

危機を促進する思いあがりと傲慢さ

JR当局と権力の威をかりて、JR総連を牛じり、動労千葉・国労つぶしとスト絶滅に血道をあげてきた革マルは、分割・民営化強行から三年目にして最悪の「支配」の危機をむかえている。「JR体制」（JR・JR総連結託体制）の最も弱い急所であるJR総連の危機は、そのままJRそのものの危機に直結している。

安全よりも何よりも、組合つぶしを優先してきたJRの異常な経営姿勢に終止符をうち、それを変革していく機が熟しているのである。

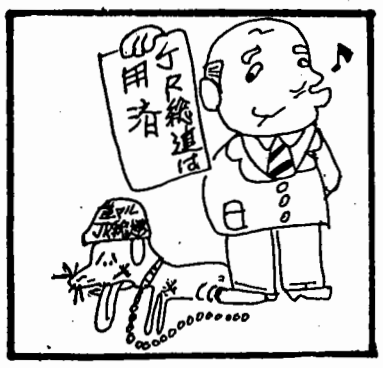
革マルの危機は、彼ら自身の言・動の中に鮮明に語られているのである。

① JR総連の第五回大会（六月十七日～十九日）で委員長杉山の後任に革マルの福原福太郎を選出、書記長には同じく革マルの柴田元企画組織局長がついた。

② 「三羽ガラスのうち二羽はダメになった」と公然と「JR西日本」と「JR東海」をののしる革マル

③ 「たたかう時は闘う」「スト権確立」をわめく革マルの胸内

つまり、革マル色を何んとかかくすために、委員長擁立（旧鉄労＝友愛会系の）を必死で画策していたものの結局失敗し、札つきの革マル分子の〝裸支配〟にならざるをえなかったのである。ここに、危機の深さを見ることができる。



いという惨状を呈しており、そればかりか、JR東労組とJR東日本の呼びかけで「JR体制」の危機をとりつくろうために開かれようとしている「世界鉄道安全会議」にも参加しない方向が語られている。

これにいらだつ革マルは、ついに公然と「三羽ガラスのうち二羽はダメになった」とののしるありさまである。

彼らは、「国鉄改革に協力したものが報れるのは当然」と〝革マル用ずみ〟に恐怖し、必死で「捨てないでくれ」と〝懇願〟し、他方では、「動労千葉・国労破壊にもっと力を入れろ、そうでなければスト権を確立し闘うぞ」「場合によっては労使共同宣言の破棄も」（松崎）などとスゴンでみせるのである。

要するに、JR当局は、組合つぶしのために、差別や選別、不当労働行為を徹底して行なえ、と要求し脅したりスカシたりしているのである。

革マル特有のやり方＝正体まる出しである。

積もりに積もった彼らへの怒りをとき放ち、さらに包囲の輪を拡げる時である。

JR総連革マルは、当局、権力のふところの中で、その威をかりて好き勝手なふるまいを続けてきた。この間の強制配転、ボーナス・賃金差別、不当処分等々、すべてJR総連革マルの「要請」を当局が受け入れ実施されてきた。こうしたことを背景にして、千葉転の革マル永島に象徴されるように、「俺たちには松崎さんがついている。処分などされない」といった横柄でごう慢な態度がまかり通っていた。（こうしたことを列挙したらきりがない。）

六月二十二日、JR東労組大会のために、岩手県雫石駅に急拠、特急列車を停車させるという問題が発生した。仮にもこれが動労千葉や国労だったらどうだろうか!? 言うまでもないことである。

こうした革マルと、さしあたり手を組む以外に動労千葉を解体することができないとするJR東日本の醜悪な野合と思いあがりに激しい怒りがひろがっている。

清算事業団闘争の高揚と「四・一」を突破し、大争議団・闘争団を形成し前進している力に、JR総連革マルはうちのめされ、ドタン場的危機をむかえているのである。彼らの必死の危機のり切り策＝凶暴化とガッチリ対決し、前進するものでなければならない。

不当処分粉砕！ JR総連解体の決意を燃やし、一層スクラムを固めよう！

7.1 団結地引網大会へ
9時より 茂原駅よりバス15分 一松海岸
海の家「あいの」